2Xa-3

国際比較からみたわが国の食料消費の現状と特質

鳥取大教育　○堤伸子　奈良女大生活環境　今村幸生

目的　世界各国の食生活は、それぞれの国の自然的風土、社会的風土に適した食料を基礎として、国民の体格・体位、所得水準、栄養に関する知識などが関係しあって、長い年月をかけて形成されてきたものである。しかし、栄養面から各国の食料消費の現状をみると、そこに一定の傾向がみられる。本研究の目的は、この傾向を明確に把握し、わが国の食料消費が国際的にみてどのような特質をもったものであるかを明らかにすることである。

方法　はじめに、各国の食料消費に関する統計資料から、それぞれの現状を把握するとともに、わが国の食料消費の特徴を明らかにする。つぎに、各国の１人当たり国民所得と総熱量、および１人当たり国民所得とでんぷん質率の間にどのような関係式が成立するかを検討する。なお分析に用いる資料は、OECD"Food Consumption Statistics 1979-1988", 農林水産省『食料需給表』（各年版）、FAO"Froduction Yearbook Vol.44"および『主要国食料需給表』、総務庁統計局『国際統計要覧』（各年版）である。

結果　わが国の食料消費は、飽食時代の到来が叫ばれるなかにあっても、国際的にみると、所得水準の高さのわりに、でんぷん質率が高く、たんぱく質および脂質が低く、「日本型食生活」と呼ばれる特殊なパターンを示している。日本および韓国を除く国々の間については、１人当たり国民所得と総熱量、および１人当たり国民所得とでんぷん質熱量比率の間に、それぞれ関係式がみいだされたが、日本および韓国についてはこれに当てはまらなかった。